

浄土真宗僧侶 名倉 幹

『修証一如(しゅしょういちにょ)』・・・日常生活の真っ只中に救いあり。

現在失業中で、これからどのように生きていくか悩みの深い霧の中におられる、ある知人女性との最近の対話です。

「名倉さんみたいにやりたいことがある人にとっては人生は意味のあるものですが・・・。私みたいに何にもやりたいことがない人にとって、人生は意味があるのでしょうか。先日、働きたくもないけれど、働かないわけにもいかないと思って、職探しだけはしてしまして、面接に行く途中、ふと電車に飛び込めば楽になれるなあと思ひまして。しかし、今電車に飛び込んで全部なしにするのと、もう少し生きてみるのと、どっちを選ぶ？と自問して、それだったら生きてみるほうを選ぼうと思ひました。そういう、きわめて消極的な理由で生きているだけです。私だって、やりたいことを見つけて生き生きと人生生きたいです。でもどうして私はやりたいことがわからないんでしょう。もう20年ほど、ずっとずっと探し求めているのに、まったくわからない。今はもう、探すこともしんどいです・・・・。」

かつて、私自身も失業を繰り返し、自分はどうあるべきか、どう生きていくべきかを考えすぎて、ついには気が狂いそうになり危ない状態に陥る一歩手前まで行ったことがあります。そこから幸いに私は、自殺しないで済み救われてきましたが、人間、自殺をふと考えるほどわからなくなってしまうことがあると思ひます。そんなこともあり私は次のように申し上げました。

「電車に飛び込んでしまったらもうおしまい。これほど自他ともに、悲しいことはありません。人間は今どんなに落ち込んでいようと、生きる意味が見つからなくてもいいのです。そういう時期もあります。

人間の能力は、一人ひとりそんなちっぽけなものでは決してないと思ひます。それぞれ一人ひとり能力も性質も異なりますが、こうして生きているという事実がもうどえらいことです。それぞれ、みんなひとりひとり何ぼでも可能性があります。

それを、自ら自分はだめだといって道を閉じてしまうのは、自分に対してまたご両親に対して、また今までこうして生かさせてくれた一切の人、もの、はたらきに対してとてもすまないことやと思ひます。

大体心臓がどうして動いているのですか。どうして息ができるのですか。どうして、食べたものはちゃんと消化されて、身につけてくれて、排泄物として出て行ってくれるのですか・・・・。

みな、自分の計らいやないですね。おのずから、こうしてちゃんとなってい

るのです。いのちの不思議な事実です。一つの完成された生命体として今こうして生きているということは、もう本当に不思議な不思議なことです。

しかし、この色々ごちゃごちゃと考える私らの頭というものは、自分というものをとつてもつまらんものと評価してしまっ、自分はもう生きる意味が無い、死んだほうがましやというように思い込んでしまうときがあります。

そのときは、どうかじーっと自分の手の平を見つめてください。

不思議やと思いませんか。こうして手があることが……。この手は、いろんなことができます。いろんな仕事ができます。

今、目が見えますか、耳が聞こえますか。字が読めますか、しゃべることができますか。目と耳と口があれば、いろんなことができます。いろんな仕事ができます。足が動けば、移動もできて仕事もできます。

手足が無く、目耳口が不自由な人でも、普通にそれらが皆揃っている人よりも素晴らしい仕事をされている方がたくさんいらっしゃいます。

中村久子さんという方を知っていますか。両手両足を病気で失ったお方でしたが、どん底の生活から非常なる苦勞をされ、口一つで裁縫も洗濯も料理も書道もされるようになり、人生をとつても力強く行き切られました。

中村久さんは、『人生に絶望なし。いかなる人生にも、決して絶望はない。』と、言い切られました。親鸞聖人の語録『歎異抄』に出会い、真剣に求道生活をされたお方でした。私は、中村久さんのことを思うと自分が恥ずかしくなりますが、同時にどん底から生きていく力が湧きあがって来ます。

そして、どんな仕事でも、打ち込んでしていけばきっと喜びが出てきます。そこにいろんな理不尽さを感じるかもしれない。いろんな辛さが出てくるかもしれない。そのときは、またそのぶち当たったときに、もがきながら考え進んで行くしかありませんわね。

なにしろ、今仕事ができるチャンスに恵まれたら、いずれにしてもそれを尊重して、打ち込んでください。

ここで私自身の話をいたしましょう。私は今から約 13 年前に 12 年間勤めました銀行を辞めてから、自分は今後どうして生きるべきか、旅したり、考えたりにしているうちに失業の状態が 1 年、1 年半と過ぎていきました。なかなか、自分自身の考えがまとまらず落ち着かず、ついに自家中毒といいますか、ふつと、住んでいたマンションのベランダから飛び降りるかもしれないような衝動、不安、動揺感に襲われたことがあります。あれは危ない状態の一手手前でした。気が狂ってしまう寸前でした。幸いに一線を越えずにすみましたが……。

しかしそのとき私は、親友にこの自分の状態を見てもらおうと、神戸までその友に会いに行き一緒に飲みました。そのとき、彼は、私の落ち着きの無い状態を見て「名倉、お前は頭であれやこれやと考えすぎや。とりあえずもうどん

な仕事でもええからやれー」と、強く真剣に言ってくれたのです。

そして私は、新聞の求人広告で見た、ある 1 年契約の営業の求人に応募したのです。それは、今までの銀行生活とは全く異なる社会での、平の飛び込み営業部隊の一兵卒のような仕事でした。私は、営業経験がそれまで全く無かったのです。しかし私は、もうがけっぷちに立って、その仕事に飛び込むしかありませんでした。

しかしそこで、わたしは救われたのです。

自分の今まで知らなかった能力を発見しました。今までやったことが無かった営業の仕事がとてもおもしろく、生き生きと仕事ことができました。同じ営業部隊の同僚とも、その後多く友人になりました。仏教書もよく読めました。毎日の生活に張り合いとリズムが生まれました。その後、また試行錯誤を繰り返し、どき回りのように仕事は転々と変わりましたが、何か自分の生きるスタンスのようなものが培われ、そしてようやく、自分が本当に心の底からしたいことは何かということが、43 歳のときに腹が決まり、つまり得度し坊さんになったのです。

もし仕事のご縁があったなら、どんな仕事であれ、『ともかくも打ち込んでやってみなはれ』と思います。自分の本当にしたいことがわからなかったらなおさら、ご縁のあった仕事に打ち込まないと、生きる充実感といいますか、喜びも生じてこないと思います。そして、何であれその打ち込んだ体験、事実はその後の自分の生きていく力になります。これは、絶対の真理であると思います。」

禅の言葉で、『只管打坐（しかんたざ）』という言葉があります。なにしろ、あれやこれやと頭で以って考えずに、坐るときは坐る、ただ只管（ひたすら）坐る、坐になり切るということです。

仕事も同じ。ご縁があった仕事に対して、この仕事は自分に向いているやろか、どうやろか、しんどないやろか、等々とあれこれ気をもまずに、只管（ひたすら）打ち込む、その仕事になり切る。その姿勢、スタンスで以って進んでいくことが肝要であると思います。

そして、どうもこの仕事は自分には向いていない、辞めたほうが良いということがはっきりすれば、また思い切って方向転換すべきときもありますね。それも、打ち込んでみないとなかなか分からないと思います。

いずれにしましても、私どもの人生行路は試行錯誤の連続じゃないですか。その試行錯誤の過程そのものに打ち込み、なり切ること自体に、そもそも生きる喜びと力がおのずから生じてくるとは思います。如何でございましょうか。それが、『修証一如』、つまり日々の生活仕事に打ち込むことそのものの真っ只中に、『証』、つまり覚り、人生の意味、喜び満足感があると私は思います。

（ご質問、ご感想をどうぞ下さいませ。 [mikinakura@nifty.com](mailto:mikinakura@nifty.com) まで。）合掌